



コーヒーブレイク

「増えて減ってまた増えて ～東川人口ものがたり」

イラスト・山本英津子

東川町史第3巻を読んでお気づきだろうが、この第1編「総説」ではたびたび人口の動きを解説している。これは第3巻の対象年度である1994年度（平成6年度）以降、全道、全国的には人口減少社会に向かおうとしていたのに、ここ東川ではそれに逆行するように人口が増えたためだ。総説で描こうとしているのはある意味「他市町村とは違って、なぜ東川町では人口が増加したの？」「どんな政策が人口増加に有効だったの？」といった疑問を解き明かすことなのかもしれない。

一方、もっと昔にさかのぼって人口を見ると、東川もやっぱり増えたり減ったりを繰り返してきた。そして増えた時には増えたなりの、減った時にもそれなりの理由があった。今回のコーヒーブレイクは94年度以降とする第3巻の対象年度からやや外れるが、ごく長期の人口の動きを見てみたい。そうすれば本編の理解を助けることにもなるだろう。

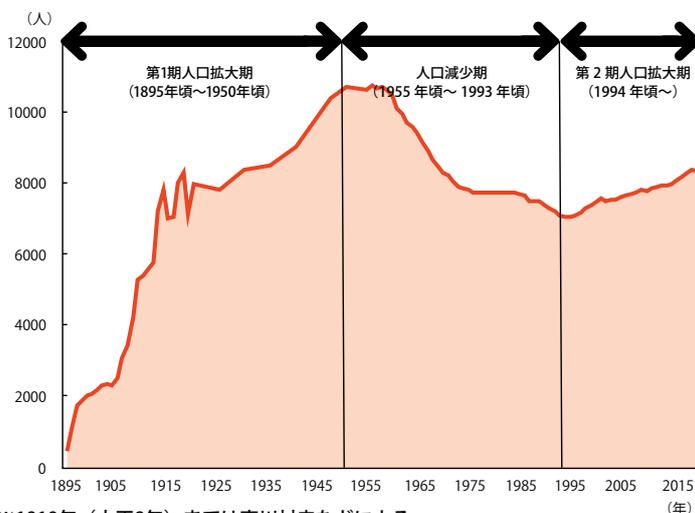
入植のころ

東川で人口の記録が残っているのは、道外からの入植が始まった1895年（明治28年）からだ。この年に香川県や富山県、愛知県などから計80世帯、472人が忠別原野（現在の東川町域）に移住した。あたり一面、原生林やヨシ、クマイザサなどの密生地だった。これ以前の記録はないためはっきりしないが、お隣の旭川などとは異なり、先住民であるアイヌ民族の定住者はほとんどいなかったと見られている（注1）。

最初に結論をいっておけば、入植開始から現代までの人口動態は大きく①第1期人口拡大期（1895年～1950年ごろの約55年間）②人口減少期（1955年ごろ～1993年ごろの約40年間）③第2期人口拡大期（1994年以降。本書執筆の2020年時点では約25年間）といった具合に分けることができる。まず第1期人口拡大期を見てみよう。

（注1）郷土史「ふるさと東川」（1994年刊）の第1巻創生編330ページには、古老による入植当時の思い出話として「（開拓地に入ったころは）東5号の忠別川沿いに1戸と西3号倉沼川沿いに1戸、また野花南^の川沿いに1戸、アイヌの人たちの住居があった」などと記されている。コタンと呼ばれるような数十人以上の集落は、少なくとも入植当時にはなかったとみられる。

入植から現代までの人口の推移



※1919年（大正8年）までは東川村史などによる

※1920年（大正9年）から50年（昭和25年）は国勢調査

※1954年（昭和29年）から2018年（平成30年）は住民基本台帳調査（毎年12月末時点）

右肩上がり

東川村史などによると、1895年(明治28年)に472人を数えた人口は翌96年に1000人を超え、さらに3年後の99年には2000人に達した。その後、2000人台で足踏みする6年ほどの停滞期を挟んで(注2)、1906年(明治39年)に3000人、09年(明治42年)には5000人に達した。

1909年といえば2級町村(当時)として東川村が東旭川村から独立し、初代の役場庁舎が建設された年だ。基線道路(現在の道道旭川旭岳温泉線)の工事も前年から始まり、急速に社会インフラが整えられていった。インフラ整備に合わせて人口も右肩上がりが増え、1913年(大正2年)には前年の5787人から6000人台を飛び越えて一気に7000人台に達した。



人口が5000人に達したころ、1909年(明治42年)の東川村(当時)の風景
=西8号北2番地で行われた東川村土功組合流水式

(注2)入植直後は毎年のように冷害や水害が発生したほか、居住に適した土地が狭かったため人口の伸びは大きくなかった。原生林の開墾が進んで平地が広がり、コメや雑穀、畑作物などの生産技術が徐々に確立されていくにつれ、入植当時には忠別原野と呼ばれた東川町域の住みやすさが増し、人口も増えていくことになった。

半世紀で1万人に

1920年(大正9年)から全国的に国勢調査が始まり、東川村(当時)の人口は同年の第1回調査時には8009人に達した。当時は不況による小作争議が頻発するなど社会が不安定で、25年の第2回調査では7855人に下がったものの30年(昭和5年)には8406人と、現在(2019年末で8377人)とほぼ同水準になった。ここまで入植開始からわずか35年間の急激な人口増加だった。

ただ前後して、1929年(昭和4年)の世界大恐慌に端を発した昭和恐慌や冷害による凶作などで、人口の伸びは鈍化する。再び人口が大きく増えたのは1940年(昭和15年)国勢調査からだ。戦後第1回となる1947年(昭和22年)国勢調査で初めて1万人を超えた後、50年(昭和25年)には10754人に達した。これが、本稿執筆の2020年(令和2年)時点までの人口のピークだ。

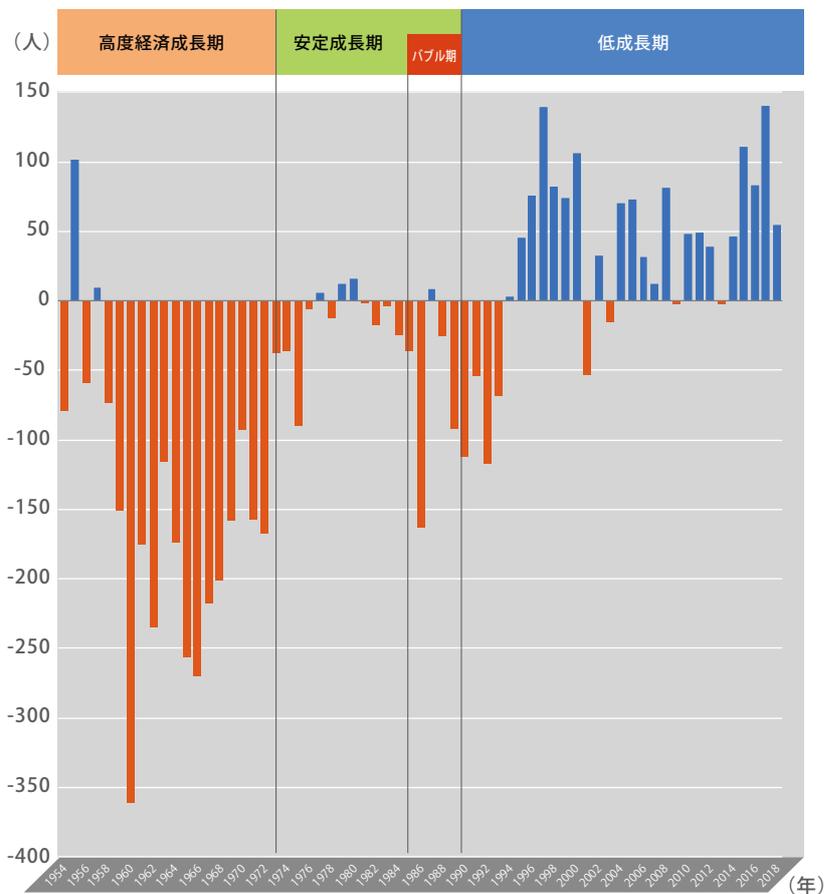
このように1895年(明治28年)の入植開始から1950年までの半世紀あまりは、社会インフラの整備やコメづくりの成功など経済基盤が強化されるにつれ、ほぼ一直線に人口が増えた。先述したようにこの時期は、東川の第1期人口増加期と位置付けられる。

そして人口減少へ

ところが東川はこの後、約40年間も続く長い人口減少期に入った。1950年(昭和25年)国勢調査でピークの10754人に達した人口は、1994年(平成6年)3月末には35.2%減の6973人まで減少した。理由は第1章「バブル崩壊を越えて」などで分析した通り、日本全体が高度経済成長に入っていくのを機に、雇用や賃金水準、利便性などの面で東川のような農村部より都市部の魅力が相対的に増し、大規模な人口移動が起きたためだ。

次のグラフは、高度経済成長が始まる直前の1954年(昭和29年)から平成末期に当たる2018年(平成30年)にかけて、東川で毎年どのくらいの人口が増えたり減ったりしたかを表している。

高度経済成長期以降の人口増減



住民基本台帳に基づく毎年12月末時点での人口を前年と比べ、減少した年は赤色、増加した年は青色で表した。1994年(平成6年)ごろを境に赤と青が、ほぼくっきり分かれていることに気付くはずだ。この赤色の期間が第1期人口増加期に続く東川の人口減少期、青色の期間は第2期人口増加期と位置付けられる。

人口減少期は1950年代半ばから1993年(平成5年)まで続いた。しかし注意したいのは約40年間続いた人口減少期も、一直線に人口が減り続けたわけではない点だ。グラフでは赤い下向きの山と山の間、人口が増えも減りもせずに推移した時期があることが分かる。1976年(昭和51年)から85年(昭和60年)までの10年間が、だいたいその時期に当たる。なぜこんなことになったのだろうか。

日本経済の動きに反比例

ヒントは103ページのグラフ上部にある。「高度経済成長期」「安定成長期」などと書かれているのは、戦後日本経済の時代区分だ。東川の人口増減の区切りと日本経済の時代区分とが、ほぼ符合していることにお気づきだろうか。高度経済成長期とバブル期は下向きの赤い山ができていて、低成長期は上向きの青色の山になっている。つまり、東川の人口は、戦後日本の景気に反比例する形で増減してきたわけだ。

少し詳しく分析してみる。グラフで最初に見える下向きの赤い山は、日本全体が高度経済成長期(注3)の時代に当たる。

この時、東川からは著しい勢いで人口が流出した。全国で住民基本台帳調査が始まった54年(昭和29年)からの推移を見ると、東川では58年(昭和33年)から75年(昭和50年)まで18年連続で人口が減少し、中でも60年(昭和35年)～72年(昭和47年)は、1960年の年間361人減を筆頭に毎年100～200人規模で人口が減少した。第1章でも述べた通り、景気の良い首都圏、札幌圏や旭川などに働き口がたくさん生まれ、「金の卵」などといわれた新卒者らが大量して都市部へと流出したからだ。



高度経済成長末期、1972年(昭和47年)の東川市街地

オイルショックで歯止め

そうした人口減少にいったん歯止めがかかったのは、田中角栄政権下の1973年(昭和48年)だ。この年秋の石油危機(オイルショック)で原油が突然高騰し、便乗上げも相次いで、景気は一気に悪化した。トイレットペーパー騒動や狂乱物価といわれた経済混乱のあったころだ。74年の経済成長率は-1.2%と戦後初のマイナスになり、日本の高度経済成長は終わった。企業は設備投資を抑制し、新規の雇用も控えるようになった。逆にこれが地方から都市への人口流出を抑えることになった。

加えて東川固有の事情もあった。町内では前年の72年から大きな宅地分譲(忠別清流団地、42区画)が始まった効果も加わり、73年の減少幅は38人とどまった。前年の72年は168人も減少していたから、減少幅は大きく縮小したことになる。

高度経済成長が終わった後の時代区分を、安定成長期と呼ぶ。10%を超えていた実質経済成長率は4～5%程度に落ち着いた。1973年(昭和48年)末から91年(平成3年)がこの時期に当たる(注4)。

グラフで分かる通り、この時期は町内からの人口流出が一服した。全国的には公害問題や交通戦争(注5)など、急速に経済成長した負の側面が目立つようになっていた。都市

(注3)日本の高度経済成長は1955年(昭和30年)年ごろ始まり、73年(昭和48年)秋の第1次石油危機まで18年間続いた。この間、実質経済成長率は年率10%を超え、64年(昭和39年)の東京五輪、70年(昭和45年)の大阪万博、72年(昭和47年)の札幌冬季五輪など巨大国家プロジェクトが成功裏に行われた。

(注4)安定成長期の後半に当たる1986年(昭和61年)末から91年(平成3年)は好況で、不動産や株価などの資産価値が実体経済を超えて高騰するバブル経済期とも呼ばれる。この時期を切り離して、1973年～85年を安定成長期、86年～90年をバブル経済期とする考え方もある。91年のバブル崩壊以降は成長率が1%程度に落ち込み、低成長期といわれる。

(注5)交通事故は自動車の普及が進んだ高度経済成長期に大きく増え、1970年(昭和45年)には交通事故による死者数が全国で年間1万6765人に達した。当時は道路や街区設計などのインフラ整備、交通ルールやマナー、自動車の安全性など、あらゆる面が未発達だった。2018年(平成30年)は3532人でピークの5分の1となり、統計が残る1948年(昭和23年)以来最小となった。

北海道の交通事故死者数は1971年(昭和46年)の889人がピーク。北海道は都道府県別で長く全国ワーストの不名誉な記録が続いたが、2018年は141人で下から数えて全国8番目だった。

や、都市周辺に形成された工業地帯の住みづらさが指摘されるようになった。

東川の人口減少がはっきりと落ち着いたのは1976年(昭和51年)ごろからだ。翌77年(昭和52年)には前年比8人増と、ようやく人口が増えた。57年(昭和32年)に9人増えて以来、実に19年ぶりのことだった。こうした落ち着いた状態は、1986年(昭和61年)に前年比163人減と再び大きく人口が減少するまで続いた。

バブル崩壊を挟んで

一時的に落ち着きを取り戻していた東川の人口が再び大きく減ったのは1986年(昭和61年)だった。全国的にはバブル経済が始まろうとしていた年に当たる。バブル期は東京や大阪、札幌など都市部を中心に、地価や株価などの資産価値が実体経済を超えて上昇した。高度経済成長期以来続いた戦後の右肩上がりの経済成長が、最終局面を迎えていた。都市部では郊外まで宅地開発が進み、そしてこの時期、東川の人口は再び大きく減少した。

バブル崩壊は91年だったが、東川では93年まで人口減少が続き、94年に前年比3人の微増になった後、人口は安定的に増加し始めた。現在に続く第2期人口増加期の始まりだ。90年代初頭から町内で始まった官民による大規模宅地造成などが人口増に寄与したが、なぜ人口が増加しているかの本格的な解明は、先にも記した通り本編での作業になる(注6)。

(注6) 第2期人口増加期は第1期のように右肩上がり人口が増えたのではなく、増減を繰り返しながらゆるやかに人口が増え始めた。1998年(平成10年)に北海道拓殖銀行が破たんした後、家具業界などが苦境に陥っていた2000年代初頭には、01年(平成13年)に年間53人も減少するなど低迷する景気が人口の伸びにも影響した。このように東川の人口は、短期的には時々々の景気に左右されながらも、中長期的には日本全体、特に都市部の経済情勢に反比例する形で増減しているように見える。



バブル経済崩壊前後、1990年代初頭の東川町市街地

おまけ

ここまで、記録が残る明治時代の入植開始から現代へと至る東川の人口の動きを追ってきた。コーヒープレークにしては理屈っぽい原稿になって恐縮だが、あともう少しだけお付き合いをいただきたい。というのはここまで書いて、では記録が残っていない明治以前の人口はどうだったのか、という疑問が生じてきたためだ。ここから先は「おまけ」として、東川町史第3巻の範囲からはさらに脱線するが、入植以前の人口についてほんの少しだけ触れてみたい。

高齢の農家さんらに子ども時代の話を知ると、東川町内でも昔は田んぼや畑からたまに土器や石器などが見つかり、農作業の邪魔もの扱いされたり、子どもの遊び道具にされたりしたそう。もしかしたら国宝級の「お宝」があったかもしれないが、今となってはどうしようもない。いずれにしても、この地には大昔から人が住んでいたことは分かっている。

東川町教委などによると、町内には埋蔵文化包蔵地(いわゆる遺跡)が23カ所あり、のうち幌倉沼遺跡(1号北25のボン倉沼川沿い)と西6号遺跡(西6号北10のあたり)の2カ所では1960年代に正式な発掘調査が行われた。

両遺跡からは墓地の跡が見つかったほか、土器片や石器片、玉類など数百点から数千点もの資料が発掘され、調査の結果、いずれも今から2千年～3千年ほど前の縄文遺跡だと分かった。2千年前ならイエス・キリストが生まれた西暦0年の前後に当たる。そんな時代に写真のような高度な土器を作る技術を持ち、共同の墓地を設けるなど社会性や精神性にも富んだ人々がこの地に住んでいたことは、もっと知られてもいい(注7)。

縄文人やアイヌ民族などこの地の先住民たちは、文字ではなく口伝で歴史を記録する文化を選択し発展させた人々だ。だから記録としては残っていないだけで、大昔からさまざまな民族がこの地に住んでいた痕跡は各所に残っている。先に紹介したグラフ「入植から現代までの人口推移」も、本当は1895年(明治28年)より前に数千年以上も続く長い長い横軸があり、何人かは分からないにしても連綿と人の営みが繰り返されてきたのだろう。そうした開拓以前の歴史についても、いつか紹介してみたいと考えている。



幌倉沼遺跡で行われた発掘作業。
調査終了後は畑に埋め戻された＝
1967年(昭和42年)ごろ



幌倉沼遺跡から出土した縄文土器
＝東川町郷土館所蔵

(注7) 幌倉沼遺跡から発掘された資料の一部は東川町郷土館で見ることができる。